

## 序

本発表では、ガダマーの解釈学における中核概念である「地平融合」の概念構築を辿るため、この概念が構築されるに至るまでにガダマーが肯定・否定の緊張関係から多大な影響を受けたヘーゲルの思想、とりわけその弁証法理論に着目し、この概念に対する一つの解釈を提示する。この弁証法理論がどのように受容され、解釈され、また批判されることで、「地平融合」、また「解釈学的経験」や「先入見」概念が樹立されたのか。

ガダマーの高弟であり、解釈学にかんする多くの著作・論文を発表している Grondin (1994) はガダマーのヘーゲル解釈について、以下の評価を下している。真理へと向かう弁証法の進行過程の無限性、そして真理と言語との密接な関わりという着想を、ガダマーはプラトン、ヘーゲルから地続きに受け継いでいると捉えている。そしてこれはもっぱらハイデガー的だとみている。(Grondin, 1994: 66) しかし Grondin は、ヘーゲルとハイデガーおよびガダマーの分岐点が以下にあるという。

[...] ガダマーは思惟と精神が言語に依拠しているということを強調することで、自身をはっきりとヘーゲルから区別しているが、それに対してヘーゲルは逆のことを主張しているように見える。ヘーゲル形而上学の立つ観念論的立脚点が純粹思惟に尊厳を与えているが、その尊厳によってヘーゲルは思惟の遂行を言語のそれに依拠させることを不可能としている。ヘーゲルがアリストテレス的な仕方で思惟をノエシス・ノエセオース〔思惟の思惟〕として理解したことにしたがえば、思惟は他ならず自己自身に依拠する。それゆえヘーゲルは、ハイデカーやガダマーが後に主題化したような言語の出来事的性格を正当とはみなさない。(Grondin, 1994: 66.)

理解、解釈の進行、その達成を表す「地平融合」は、本質的に言語的なものである。「存在」の経験としての真理経験を「言語」におけるやりとりのうちにみるガダマーの思想体系において、「言語」のもつ思弁的機能を読み解くことは、避けては通れない重要な課題である。しかし上記引用で Grondin が示すように、ガダマーがヘーゲルと袂を分かちハイデガーと共鳴したのが、「言語」のもつ出来事的性格の重視という点である、という理解が十分なものであるとは考えにくい。たしかにヘーゲルにおいては、意識に対し、「言語」は中心的役割を担わない。とはいえ、ガダマーとヘーゲルを結ぶ「言語」、弁証法の関係は、このような一面的な理解で済ませられるものではない。

本発表では、第一節において、ガダマーの主著『真理と方法』（以下 WM、引用は全集第一巻 GW I より行う）における「地平融合」概念を確認する。この時、「解釈学的経験」や

「先入見」、「作用史的意識」といったガダマーによる他の概念との関係にも触れる。というのもガダマーによれば、とりわけ「作用史的意識」の重要性を覆い隠してきたのがほかならぬヘーゲルだからである。加えて、ヘーゲルの「絶対知」「絶対精神」に対するガダマー解釈学のアンチテーゼを本発表同節で確認する。

続く第二節から第三節において、WM 出版以後に公刊された論集『ヘーゲルの弁証法』(*Hegels Dialektik*, 1976/1980、以下 HD、引用は全集第三巻 GW III より行う)を読解し、WM 内では見出されないその影響関係を取り出すことを試みる。第二節では、ガダマーとハイデガーの二者間でのヘーゲル読解の差異について論じ、第三節では、ヘーゲルに沿うことでハイデガーを乗り越えようとするガダマーを映し出す。またヘーゲルとハイデガーがどのように共通点を持ち、どのように差異を有するのか、そのガダマーの評価についても論述する。第二節、第三節の論述によって、われわれはガダマー解釈学における、ヘーゲル弁証法的性格がどのようなものであるかを確認することが可能となる。そして第四節において、これらの議論から導出されたものからどのように地平融合を捉えていくことができるのか、その一つの解釈を提示する。

#### 第一節 『真理と方法』から読み取れる「地平融合」概念とヘーゲル理解についての整理

「地平融合」へと至る理解は段階をもって進行する。文化・慣習による文脈を含む「世界」に被投されている解釈主体の先入見から形成されている地平から、解釈対象を理解しようと努め、「問い」を投げかける。その問いに応答する形で、対象に対して何らかの「答え」を得る。これが理解の進行の第一段階である。次に、その答えを受け取ることで、解釈主体の地平に揺らぎが起こる。揺らぎ、変容した地平から、再び解釈対象に向けて「問い」が投げかけられる。これは先ほどと全く同質の問いではありえない。なぜなら、その問いを発している解釈主体の地平は第一段階が駆動する時点のものとは別様のものとなっているからである。そうすると、この応答たる「答え」もまた、解釈対象はその字面上で変化するものでなくとも（本の紙面に落とされたインクのシミは変化しない）、解釈主体に別様なものとして受け取られるのである。(WM. 383ff.) これが第二の段階であり、第三の、第四の段階と、どんどんと積み上がっていき、理解は進行していく。そして、他者として、そのままでは理解しているものとして映らなかつた解釈対象、解釈主体とは異なった地平を背負ったものに見えていた解釈対象との間に起こっていた理解は、ついには「地平融合」に到達する。

上述の説明のように、解釈主体の地平と解釈対象の地平、双方の地平の変容によって地平融合は生じる。(WM. 270 ff bes. 272 f.) 双方の変化といえども、ここで考えられているのは、特に後者の変化については、主体の地平の変容による、その段階での主体が解釈していることによる、対象の変化だと考えられる。このような図式で双方の変化が捉えられることをガダマーは、「対話構造」という語で表現する。

この対話には、二つの循環が備わっている。第一に、部分と全体の循環という、文献解

積の技法の集積としての学であった古くからの解釈学からずっと語り継がれているものがある。そして第二に、ハイデガーの先行把握や被投性概念を根源とする循環がある。ガダマーはWMで明示的に、地平を形成する「先入見」の概念について、ハイデガーの『存在と時間』の第32節の解釈学的循環の議論から説明している。被投的企投としての解釈という循環が、地平融合に本質的に存している。

だがガダマーからすれば、「地平融合」、すなわちある地平と他なる地平が言語の力によって接近し、それによって現象それ自体の理解へと進むという段階的駆動を必要とする概念は、「存在の歴史の破壊」を目指すハイデガーにただ追従するのみでは、現れてこないものである。本稿におけるわれわれの見立てでは、それはヘーゲルの弁証法概念を、ハイデガーを介して刷新することによって、はじめて現れるのである。

われわれの目的はまさにこのガダマーの「地平融合」をヘーゲル弁証法から読み解くことにあるが、上記のハイデガーを継承するガダマーにとって、ヘーゲルにおけるドイツ観念論的な〈近代性〉は、もちろん看過しうるものではない。WMでのヘーゲルの言及をみると、たしかにガダマーは、その弁証法構造に着目し重要性を説いている。しかしその一方で、そこには必ず、反省哲学の中核的構造として抽出される、超越論的〈方法〉に対する批判が含まれているのである。

WMのうちで、ヘーゲルは以下のような仕方で登場する。WM第二部第II章第3節a「反省哲学の限界」で、ヘーゲルの弁証法への批判を経た上で、ガダマー解釈学における「作用史 Wirkungsgeschichte」概念を明確に特徴づけている(WM. 347ff.)。というのも、ヘーゲル弁証法が哲学史上にもたらした「歴史と真理との絶対的媒介」(WM. 347、強調はガダマーによる)としての「反省 Reflexion」の構造の影響が、シュライアーマッハー、ディルタイに至るまでの(哲学にひきつけられた)解釈学の歴史に通底しているとガダマーは捉えているためである。この「反省」構造によって打ち立てられた解釈学の前提を覆すものとして、作用史、また「作用史的意識 Wirkungsgeschichte Bewußtsein」は、地平融合の過程を説明する概念として登場させられるのである。

すべての個別的なものが絶対者のうちへと汎神論的に含み込まれているということ、このことがまさに〔シュライアーマッハーやディルタイが考えているような〕理解という奇跡を可能とするのである。(WM. 347)

われわれにとって重要なことは、作用史的意識を次のような仕方で考えることである。すなわち、作用の意識において作品の直接性や卓越性が、単なる反省的現実へと再び解消されないというように考えること、したがって、反省の全能が限界づけられる(sich begrenzt)という現実性について考えることである。(WM. 348)

限界を限界たらしめているものは、いやそれどころかつねに同時に、その限界によって局限されたもの(Eingegrenzte)が限界づけるところのものを取り囲んでいる。それ

が止揚することでもってのみ存在するのが、限界の弁証法である。<sup>1</sup> (WM, 348)

ここでのガダマーの批判を端的に示そうとするならば、それは、超越論的「反省」による、「絶対精神」や全能性への到達不可能性と表現できるであろう。この批判のオルタナティブとして提出される「作用史」は、どこまでもその本質に有限性を含んでいる。よって、「理解」現象、「地平融合」、もしくは端的に「解釈学的経験」は、ヘーゲル的な絶対性と原理的に接触不可能である。のちの第四節でも述べるが、「主観」と「対象」が無媒介となる統一の実現において、解釈学的経験はもはや存在しない。

ガダマーのヘーゲル理解は、「地平融合」概念にどのように影響しているのだろうか。これを探るため、本発表では WM 出版以後に公刊された論集『ヘーゲルの弁証法』(*Hegels Dialektik*, 1976/1980、以下 HD、引用は全集版第三巻 GW III から行う)を読解し、WM 内では見出されないその影響関係を取り出すを試みる。

## 第二節 ガダマーのヘーゲル読解とハイデガーのヘーゲル読解

拙論で論じたように、ガダマーはアリストテレスおよびプラトンのフロネーシス概念とディアレクティケーを自らのものとして「地平融合」に組み込んでいる(下山 2023a)。WM では十分に示され得ないものの、ヘーゲルはこの〈古代ギリシャ〉の系譜をもつ者としてガダマーは理解している。そのことは、表題にあるように HD 第一論文「ヘーゲルと古代弁証法」(初出 1961 年)に示されている。だがこの論文の名を聞けば、即座にハイデガーの『道標』に収録された「ヘーゲルと古代ギリシャ人」(初版 1958 年)が思い起こされる。「ヘーゲルと古代ギリシャ人」はガダマーの 60 歳記念論集に寄稿されていることから、〈古代ギリシャーヘーゲル〉のつながりについてガダマーがハイデガーから多分に影響を受けたということは想像に難くない。後述するが、ガダマーのヘーゲル理解はハイデガーのそれに依拠しているところが大きい。しかし、それゆえに両者のヘーゲル理解の差異を示すことで、ガダマーのヘーゲル理解の独自性を示すことができるのである。

ガダマーとハイデガーにおけるヘーゲル理解において、ヘーゲルが古代弁証法、すなわちプラトンのディアレクティケーを最も正統に引き継いでいるという点は共通している。だが、彼らの理解の差異は最も端的に言えば、ヘーゲルに〈近代性〉、すなわち主観性 (Subjektivität) を基体 (subjectum) とすることを認めるか否かというところにあるだろう。つまり、ハイデガーはヘーゲルに近代性を認め、他方ガダマーはヘーゲルに近代性を超えるものを認める。本節では両者の差異がなぜ生じたかについて論じる。

ハイデガーは「ヘーゲルと古代ギリシア人」(1958 年)において、ヘーゲルの弁証法を次

---

<sup>1</sup> 限界づけと追求される無限なものとの関係、すなわち有限性の自覚と無制約性の担保との関係については、例えば「哲学的倫理学の可能性について」(1964)などの論文でも、ガダマーは同型の議論を展開している。この話題は下山(2023b)においてより詳しく触れた。

のように説明する。

弁証法は絶対的主観の主観性の生産プロセスであり、そのものが「必然的行為」としてある。主観性の構造に従えば、その生産プロセスは三つの段階がある。第一に、主観は意識として無媒介的に客観へと関係づけられる。〔…〕〔第二に、〕再帰的關係づけ、すなわち反省によって初めて客観は主観にとっての客観として、主観はそれ自体にとって、すなわち客観に自らを関係づける主観として表象される。〔…〕客観つまり存在はたしかに反省によって主観と媒介されているが、しかしその媒介それ自体はまだこの主観にとっての主観の最も内的な運動としては表象されていない。〔第三に、〕客観の定立と主観の反定立が、必然的綜合において見出されてはじめて、客観と主観の關係づけという主観性の運動がその遂行において完成する。その遂行は定立から出発し、反定立へと進み、綜合の中へと超越し、その綜合に端を発して、定立された定立がそれ自体へと再帰することの遂行としてある。この遂行は主観性の展開された統一の中へと主観性の全体を凝集する。(GA IX, 430f、強調はハイデガーによる。)

こうした記述からわかるのは、まず、主観が客観を包含していくプロセスとしてハイデガーは弁証法を捉えているということである。こうしたプロセスをハイデガーは容認せず、批判すべき事柄としてみる。というのも、「〈ヒューマニズム〉についての書簡」(1946年)を参照すれば、まさしくこうしたことが「存在者が存在から見捨てられている」という「故郷喪失」「存在の忘却」であるとされるからである(GA XI, 339.)。「人間がそこで存在を表象のなかで持つということを避けられ得ないから、存在も「最も一般的なもの」、それゆえ存在者を包括するものとして、あるいは無限の存在者を創造するものとして、有限な主体が作ったものとしてしか説明されない」(Ebd.)。こうした存在の「非覆蔵性」がヘーゲルには欠如している、というのがハイデガーの見解である(GA XI, 439 ff.)。したがって、ハイデガーにとって、人間は主観として客体ないし存在を産出するものではなく、「語りつつ、現前するものをその現前性において現存させしめ、その現存するものを聞き取る(vernehmen) 存在者」(GA XI, 442 f.)である。

しかしガダマーは、こうした存在の我有化をヘーゲルに認めはしない。

要約すれば、ヘーゲルによる弁証法の本質を形成するのは次の三つの契機である。第一に、思惟は或るものを思惟自体にあって思惟することである。第二に、そのようなものとして、思惟そのものは矛盾する諸規定の必然的な共同思惟である。第三に、矛盾し合う諸規定の統一は、それらの諸規定がその統一のなかで互いに止揚しあう(sie[die Bestimmungen] in ihr sich aufheben)ということによって、本来的な自己となる。(GW III, 16.)

ここで注目されるのは、弁証法においては「互いに止揚しあう」ということである。「それらの諸規定がその統一のなかで互いに止揚しあう」ということを、より一歩進めて解釈すれば、以下になる。すなわち、「それらの諸規定がその統一のなかで、それぞれの規定自体を止揚する」と読み解くことができる。弁証法が、一般に主観と客観の間で取り交わされるものなら、ガダマーの弁証法は、その諸規定が何らかの主観と何らかの客観をそれぞれ止揚するということを意味する。それゆえ、ハイデガーのように、主観が客観を主観性において取り込むのではなく、主観が主観として、客観が客観として相互に関係づけられるなかで定立されていく過程がガダマーのヘーゲル弁証法解釈であると言える。

こうした解釈は、ガダマーがヘーゲルの解釈を提示し、そのまとめを行う際によりはっきりと示される。

こうして、われわれの考察の円環が閉じられる。この円環は、まさにヘーゲルが自身の哲学的苦心を近代の状況に制約された仕方、古代人に課題を見出したとき、全くさかさまの課題を立てたように見える点であった。いまや肝要なのは、固定された悟性の定立を「流動化させ、生气づける」ことである。それは、すべての積極的なもの、疎外されたもの、他なるものを、それ自体がそのもとにある精神という存在という、そのような故郷的なものななかへと (in das Heimische des Beisichseins des Geistes) 解消することであり、その解消は哲学的証明の「再興」というヘーゲルの意図を動機づけた。(GW III, 25.)

ここで注目されるのは、「故郷的なもの das Heimische」の導入である。この記述から読み取れるのは、「近代の状況に制約された仕方」という留保がつけられているが、ヘーゲルが、ハイデガーによっては「喪失」したものとみなされた「故郷」を、その実、自己のもとに取り戻すということを意図していたのだと、ガダマーが受け取っていることである。ハイデガーは、ヘーゲルが客観、すなわち主観にとって「疎外されたもの、他なるもの」を、そのプロセスにおいて「主観として」回収するからこそ、ヘーゲルは「存在の忘却の歴史」に組み込まれるとした。それに対して、ガダマーにとっては客観が、そのまま「故郷的なもの」に解消されるという点でハイデガーと対照を為す。

古代ギリシャ人がそうした「故郷」に安らい、ヘーゲルはこれを「喪失」したというハイデガーの評価に対し、ガダマーの見解はある種の逆転を起こしている。つまり、プラトンには欠如していた〈第三の人間〉、これを解消する可能性、すなわち詭弁と論述が「共同思惟」の「統一」のなかで互いに意義を持つ可能性を弁証法によって示したことで、ヘーゲルはある側面においては古代ギリシャ人よりも「ロゴス」へと接近していた、とガダマーは評価するのである。この詭弁と論述の「共同思惟」としての「ロゴス」への接近は、拙論でこれまで問題としてきた「事柄に即した前進 ein sachlicher Fortschreiten」と言い改められている (GW III, 21.) ことからわかるように、こうした弁証法による「ロゴス」

ないし「事柄」の発見によってヘーゲルは、ガダマー解釈学の明確な先行者となるのである。

したがって、序において紹介した Grondin による、ヘーゲルとハイデガーおよびガダマーの分岐点についての評価は、ハイデガーにとっては正しくても、ガダマーにとっては不十分な規定であると言える。加えて次のことは Grondin の評価をより一層疑わしいものとする。ヘーゲルによる古代ギリシャ哲学解釈の不正確さを認める点で、ハイデガーとガダマーは同一線上にいると言える (GW III,20 ;GA XI, 440. )。しかし、この解釈の不正確さゆえに、ハイデガーがヘーゲルを存在忘却へと接続したのとは逆に、ガダマーはヘーゲルの洞察をヘーゲル自身の思想において正当化し、「ヘーゲルはプラトンおよびアリストテレスを個々の点で誤解をしているにしろ、全体においては全く正しく理解しているのではないか？」という見立てをもつのである (Ebd.)。

ヘーゲルは、WM ではその限界が明らかなものとされた「反省哲学」の一つとされ、また HD においてもその弁証法に対し「近代の状況に制約された仕方だ」という留保が明確に付けられている。しかしガダマーにとってヘーゲルは、簡単に論敵として切り落とせる相手ではないのではないか。

### 第三節 ヘーゲルとハイデガー

ガダマーのヘーゲル理解とはどのようなものであるか。ヘーゲルがハイデガー的な存在忘却にかならずしも留まらないという HD 第一論文での解釈と、WM で行われたヘーゲル批判の間には一つの乖離があるように見える。他方、先述のように、ガダマーはヘーゲルに対し、プラトン／アリストテレスのある種の乗り越えを見出しているが、「近代の状況に制約された仕方だ」という留保もつけている。ガダマーによるヘーゲルの多面的理解をよりわかりやすくするためには、ガダマーがヘーゲル、そしてハイデガーの各々とどのように近づき、どのように分離しているのかを見定めることが効果的であると考えられる。この問題はまさに HD 第六論文「ヘーゲルとハイデガー」(初出 1971 年)において、〈ヘーゲルを読むハイデガー〉の読解のなかで扱われる。この論文でガダマーは、〈近代性〉を存在忘却と結びつけるためにヘーゲルを退けたハイデガーの解釈を介し、その上でハイデガーに反してヘーゲルをその〈近代性〉のもとで再び持ち上げるのである。

この「ヘーゲルとハイデガー」においてガダマーが目論むのは、ハイデガーから離反することであり、それによって——ヘーゲルに対するマルクスがそうであったように——ハイデガーの価値を保存するという、ハイデガーに対する弁証法を演示することである。しかも、ハイデガーがヘーゲルに対して退けた問題を復活させることによって、ガダマーはこれを遂行しようとする (GW III, 89.)。まさにここにおいてガダマーは、ハイデガーとヘーゲルの「共同思惟」を見出すことで、両者の相互止揚を為そうとしている。

先述のように、「ヘーゲルとハイデガー」では、ヘーゲルの近代性はもはや WM のような消極的意味だけでなく、積極的意味を持つようになる。

しかし、真なるものが、その生成から分離可能な結果であるのではなく、その生成と道の全体であり、それ以外ではないということが哲学的思考の弁証法的な自己関係性を形成するのではないだろうか？ たしかに、ヘーゲルの真理という理念に存する思惟の自己神格化から、それを否定し、ハイデガーと共に人間の現存在の時間性と有限性を対置する〔……〕ことで避けようとするのが、容易に思い起こされる。しかし、そのことによってヘーゲルを全く正当とみなせるかどうか問われている。ヘーゲルの教説がたつぷりと示し、われわれが最初に実例において演示した両義性は、最終的に積極的な意義を持つのである。この両義性は全体の概念とそこから最終的に帰結する存在の概念を全体的規定性ということから思惟することを許さないのである。(GW III, 96.)

引用からもわかるように、ガダマーにとってのヘーゲルの近代性、すなわち主体と客体の弁証法的関係性は、退けてしまうべきものではないとされている。拙論(下山 2023a)で示したように、ガダマーは単に人間の有限性と時間性——あるいは歴史性——のみを徹底して哲学を捉えるのではない。というのも、そうした有限性の徹底が全体の概念へと帰趨するという逆転が生じるからである。ここで、ヘーゲルによる思惟の自己神格化は、ハイデガーの思想との対置を経て、積極的な意味を孕んだ両義性へと帰着する。

ハイデガーはヘーゲルに対する批判に自ら引き戻されてしまっているとガダマーは指摘する。つまり、「この現前性は言表されるべきである。すなわち現前性のまわりを、述語的に構造化された言表が、安らうことなき自己止揚において戯れ動く。これが弁証法である。ハイデガーは、言表としての言語へと向かっていったのではなく、われわれに語りかけることで与えられる現前それ自体の時間性へと向かっていったのだが、彼にとって、〈述べること〉(Sagen)は常に一層、全体において〈述べられうる〉(zu Sagende)ことに依拠すること(Sich-Halten-an)であり、〈述べられないこと〉(Unsagten)に対して自制すること(An-sich-Halten)である」(GW III, 100.)。ガダマーの批判にひきつけて解釈されるこうしたハイデガーの思想では、〈述べること〉は〈述べられうる〉限りにおいて、それを〈述べること〉であるという。それゆえ、〈述べること〉はその“全体”によって規定され、〈述べられないこと〉があることは、ハイデガーにおいては知られないままである。ここから次のことが言える。つまり、ハイデガーがヘーゲルに対して向けた「絶対的主観性」の一元論という批判は、転じて、存在一元論としてハイデガーに対してもさらに別の仕方で向けられうる。

さらに、ガダマーはハイデガーとヘーゲルから、それらを止揚することを試みる。この時注視されるのがまさに先の「両義性」の問題である。ガダマーはヘーゲルに次の点から「両義性」をみる。つまり、ヘーゲルが弁証法によって自然と歴史に対する理性の勝利を宣言する際、他己としての自然と歴史をともに自己としてしまうことで、自己そのものが



分裂するという事、そしてその分裂ゆえに理性が勝利したにもかかわらず、弁証法が継続するという事である。この事は先の引用でのハイデガーと対比的である。さらに一つ手前に挙げた引用の最後の一文の繰り返しとなるが、この両義性からガダマーは「全体の概念とそこから最終的に帰結する存在の概念を全体的規定性ということから思惟すること」(GW III, 96.) ができないことを導き出す。このような道筋を辿って、ヘーゲルの弁証法は、常に他なるものを産出しつつ、自己の陶冶を行う、そして駆動しつづけるものとして、ガダマーの前に現れるようになる。

だが弁証法による他なるものの産出をこのような仕方では描くことは、ハイデガーの「存在の忘却」という契機なしには、すなわち弁証法が自己自身を求め続けるということが解明されることなしには叶わない。ハイデガーが「われわれに語りかけることで与えられる現前」というものを示さなかったならば、その他なるものが存在することもわからないままである。加えて、ヘーゲルのみにそって考えたならば、以下の問題に陥ってしまう。すなわち、他なるものが産出され、それが存在するということが理性によってなされるならば、そもそもその過程は理性の範疇に留まる。このことこそが、ハイデガーの批判したことであったのは先に確認した。

問題は、この両者を止揚することである。つまり、〈述べられない〉ものが〈述べられないもの〉としてある、このことを〈述べること〉を可能にしているのは何かが問われねばならない。そしてこれが、まさしく言語であるということになる。

秘匿だけが本質的に顕現と結びついているのではなく、秘匿することの本来的な、しかし秘匿されてはいる働き、すなわち〈存在〉をそれ自体のなかへと言語として守り隠す *bergen* という働きもまた、顕現と結び付けられているのである。

[...]むしろ、言語的な世界関係において語られることそれ自体が、われわれの世界内存在の言語体制によって初めて分節化される。語ることは、言語の全体に、すなわちそれによって語られているものが常に飛び越えられるところの対話の解釈学的潜在力に関係付けられる。(GW III, 101.)

未知の言語に出会ったとき、というガダマーが提出した例に基づいてこの記述を読解すると、以下となる。未知であるということを言語化することで未知であることを知るが、それが何らかの指示を行っている言語であること、すなわち解釈可能であることは理解される。その未知の言語を理解するにつれ、何が未知であったのかがより明らかになる。より具体化すれば、日本語話者とドイツ語話者が完全に置き換え可能な形で互いを理解することは(おそらく)不可能であるが、少なくとも、その置き換えが漸次的に進行するような試み自体は無限に遂行可能であるだろう。その対話の中では、相互に相互を理解しあうことだけではなく、相互が相互の差異を理解しあうことで、お互いの理解を進めるのである。

#### 第四節 地平融合とヘーゲル

第二節、第三節の議論を踏まえ、ガダマーのヘーゲル弁証法理解と重ねて、地平融合を説明しようとする以下のようなことになる。

まず第一節で行なった地平融合の説明を再掲するが、以下のようなものであった。

解釈主体の地平と解釈対象の地平、双方の地平の変容によって地平融合は生じる。双方の変化といえども、ここで考えられているのは、特に後者の変化については、主体の地平の変容による、その段階での主体が解釈していることによる、対象の変化だと考えられる。このような図式で双方の変化が捉えられることをガダマーは、「対話構造」という語で表現する。

この説明に対して、第二節、第三節での考察を経て、われわれは以下の注釈を付け足すことが可能となる。ここで解釈主体の地平として考えられているものは、ヘーゲルとハイデガーとの止揚の結果として導き出された「主体」概念と対応させることができる。また、解釈対象の地平と「客体」とを、また地平融合の動的過程とハイデガーによる批判を経た上で再構成されたヘーゲル弁証法とを対応させて考えることができる。つまり、解釈主体の地平と解釈対象の地平は、各々が各々を可能とする、その規定によりたがいに定立している。それらは共同して止揚されることで、ある種の統一へと向かう。このとき、統一はその地平による止揚の場である「言語」の全体に関連づけられているが、それによって規定されることはない。

対話は無限に続くものであり、対話構造が解消され、対話をしていた相手と統一され、一者となることは想定されていない。換言すれば、解釈主体が解釈対象をその全体において理解することも、主体が種々の理解の契機を何度も経ることで主体自身の全体へと至ることも、地平融合の営みにおいては訪れないのである。よって、地平融合は一度きりの大きな出来事として取り上げられるもののみを示すものではなく、大小様々な度合いで、理解の運動が進んでいるそれらの結果全てを、その過程を全て含めて表すものとして、捉えることができる。このような仕方でも、ガダマーにおけるヘーゲル弁証法の影響の分析から、「地平融合」のひとつの解釈を、本稿はいまや提出するに至った。

#### 結

本稿では、ガダマーにおけるヘーゲル弁証法の影響を考証し、これをもとに地平融合の概念化の内実について、「言語」の弁証法的・存在論的機能に着目して一つの解釈の提示を試みた。ガダマーはヘーゲルと自身の関係をまなざすとき、常にハイデガーをその視界に収めており、このときまた、ヘーゲルとハイデガーの関係に言及することで自身のヘーゲル理解、ハイデガー理解、そして解釈学体系を開陳するに至ったのだった。

また第四節で提示した地平融合の解釈について、たとえば以下のように問うことができる。一なるものになることが目指されているのではなく、理解の対象や主観の全体を、主観

によって把握することが目指されているのでもないならば、地平融合の行先とは、個々人にとってその都度一義的な解釈へと辿り着いたとしても、その個人同士においては、各々の解釈の集積でしかないのだろうか。つまり相対主義的であるという批判から、原理的に逃れられないような概念でしかないのか。本稿においてこの核心的かつ重大な問いに応え切ることが叶わないが、以下のガダマーの記述を見ることでこの問いに対抗する一助を得たい。第三節で取り上げた第六論文「ヘーゲルとハイデガー」において、ガダマーはこのように論文を締めくくっている。

言語がなおそのように著しくこのような技術的関数 (Funktion) に入れ込もうとするなら、その関数は、言語と同様に、われわれの本性的なもの (Natürlichkeit) の定数を確定する。その本性的なものによって哲学の言語もまた、その本性的なものが言語でありつづけるかぎり、対話のなかにありつづけるだろう。(GW III, 101.)

ここでの「技術」は技術社会として記述される、技術が発展し近代自然科学的な認識の受容が広くなされた現代社会、すなわち〈近代性〉と連続する語として用いられている。ここでの議論で導出される「本性的なもの」という概念に着目したい。上の記述において、本性的なものが言語でありつづける限り、哲学の言語が対話のなかにありつづけると言われているが、これを解釈すると、以下ようになる。つまり、近代科学的図式における主観—客観関係によってものごとくが捉えられ、そのようにして言表される言葉が溢れるなかで、世界に対する解釈の多義性はますます強まり、その言述は大量に出力される。この大量の出力結果は、たんにわれわれを惑わせるだけではなく、それらに対して解析を行うことによって、そこに働く関数のもとでそれでもわれわれには定数として常にかかわる「本性的なもの」を探り当てることが可能となる。本性的なものの身分は、上記の記述にある通り、言語である。そして言語とは、理解しようとするものと理解されるものとの間での「対話」のうちで、常に本質的に存する。われわれが言語によって哲学を行うとき、哲学で探求されるもの、本性的なものとは、この対話のうちで常に発生し刷新され続ける言語として現れる。

この「本性的なもの」の読解にはプラトン/アリストテレスに対する理解をpushしなくてはならないが、本稿では上記二人をはじめとする古代ギリシア哲学について、主題的に扱うことができなかった。彼らとヘーゲルとの接続についても、ハイデガーとガダマーは多くを共有し、また差異を抱いている。今後の展望としてこの点にも焦点を当て探究をすすめていきたい。

文献

Gadamer, Hans-Georg; *Gesammelte Werke*. 10 Bde.

--; *Hegels Dialektik: Sechs hermeneutische Studien*. 2. vermehrte Aufl. Tübingen 1980. [ガ  
ダマー、ハンス＝ゲオルク 『ヘーゲルの弁証法』 山口誠一・高山守訳、未来社、1990年]

Heidegger, Martin; *Sein und Zeit*. 19. Aufl. Tübingen, 2006.

--Hegels Begriff der Erfahrung, in: *Holzwege. Gesamtausgabe*. Hrsg. v. Friedrich v. Hermann,  
Bd. 5, Frankfurt a. M. 1977, S. 115-208.

--; Die Frage nach der Technik, in: *Vorträge und Aufsätze. Gesamtausgabe*. Hrsg. v.  
Friedrich v. Hermann, Bd. 7, Frankfurt a. M. 2000, S. 5-36.

--Brief über den Humanismus, in: *Wegmarken. Gesamtausgabe*. Hrsg. v. Friedrich v.  
Hermann, Bd. 9, Frankfurt a. M. 1976, S. 313-364.

--Hegel und die Griechen, in: *Wegmarken. Gesamtausgabe*. Hrsg. v. Friedrich v. Hermann,  
Bd. 9, Frankfurt a. M. 1976, S. 427-444.

Grondin, Jean; *Hermeneutische Wahrheit?: Zum Wahrheitsbegriff Hans-Georg Gadamer*.  
2. verbesserte Auflage, Weinheim 1994.

Pipin, Robert B.; Gadamer's Hegel, in: *Gadamer's Century: Essays in Honor of Hans-Georg  
Gadamer*. Hrsg. v. Jeff Malpas, Ulrich Arnsward u. Jens Kertscher, Cambridge/London 2002,  
S. 217-238.

小平健太『ハンス＝ゲオルク・ガダマーの芸術哲学——哲学的解釈学における言語性の  
問題』、晃洋書房、2020年。

下山千遥「ガダマーの解釈学における地平の歴史拘束性の徹底についての考察:R. ローティ  
を導き手として」、『アルケー』(31)、関西哲学会、2023a、88-99頁。

——「ガダマーにおける〈適用 - フロネーシス〉の関係性:『真理と方法』前後の比較を通  
じて」、『人間存在論』(29)、京都大学大学院人間・環境学研究科『人間存在論』刊行会、  
2023b、79-89頁。